重留村下遺跡 3

－重留村下遺跡群第４次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第880集

2006

福岡市教育委員会

しげとめむらした

重留村下遺跡 3

－重留村下遺跡群第４次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第880集

調査番号　０４５３
遺跡略号　SGM－４

２００６

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えてきた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書で報告いたします重留村下遺跡群では、これまでに弥生時代から中世までの生活の跡が発見されています。

今回の調査では古墳時代後期の竪穴住居が発見され、当時の生活用具である土師器や須恵器などが出土し、この地域の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力をいただきました林穂積様をはじめとする関係各位の方々には、心から謝意を表します。

平成18年３月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木　とみ子

例　言

1．本書は、福岡市早良区重留１丁目500－１における店舗付共同住宅建設に伴い、福岡市教育委員会が2004（平成16）年10月４日から11月12日にかけて発掘調査を実施した重留村下（しげとめむらした）遺跡群第４次調査の報告書である。
2．遺構の呼称は記号化し、竪穴住居→ＳＣ、溝→ＳＤ、土坑→ＳＫ、ピット→ＳＰとした。遺構番号はピット以外を種類に関係なく連番とした。
3．本書に使用した遺構・遺物実測図は田上勇一郎が作成した。製図は田上があたった。
4．本書に使用した写真は田上が撮影した。
5．本書に使用した標高は海抜高である。
6．本書に使用した方位は磁北である。本地域では真北に対し６°21′西偏する。
7．本書の執筆は田上が行なった。
8．本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。

目　次

Ⅰ　はじめに ……1
　1．調査にいたる経緯 ……1
　2．調査の組織 ……1
　3．調査地点の立地と環境 ……2

Ⅱ　調査の記録 ……4
　1．調査の経過と概要 ……4
　2．発見された遺構と遺物 ……6
　　（1）　竪穴住居 ……6
　　（2）　溝 ……14
　　（3）　土坑 ……15
　　（4）　その他の遺物 ……15

Ⅲ　まとめ ……16

Ⅰ　はじめに

1．調査にいたる経緯

2004（平成16）年６月29日付けで、林穂積氏から福岡市早良区重留１丁目500－１における店舗付共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、申請地が重留村下遺跡群の範囲内であることから、試掘調査が必要と判断した。試掘調査は７月15日に実施し、対象地に土坑や柱穴などの遺構が存在することが確認された。そこで、試掘調査の結果をふまえ、申請者と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、建築工事によって破壊される部分を対象に本調査を実施することで合意に達した。埋蔵文化財課は林穂積氏と委託契約を結び、一部国庫補助金を受けて調査を実施した。現地での発掘調査は2004（平成16）年10月４日より11月12日まで実施した。整理作業と報告書の刊行は2005（平成17）年度におこなった。

2．調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託　林穂積
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　　植木とみ子
調査総括　埋蔵文化財課　　課長　　山口譲治
　　調査第１係長　田中壽夫（平成16年度）
　　山崎龍雄（平成17年度）
調査庶務　文化財整備課　　管理係　　後藤泰子
事前協議　埋蔵文化財課　　事前審査係長　濱石哲也
　　事前審査係　　本田浩二郎（試掘調査）
調査担当　埋蔵文化財課　　調査第１係　　田上勇一郎（本調査）
調査作業　上野道郎　金子由利子　指山歌子　柴田勝子　平井和子　堀川ヒロ子　門司弘子
整理作業　牛尾美保子　海内美也子　川田京子　武田祐子　山口とし子

発掘調査に至るまでの条件整備や調査中の調整などに関して、林穂積様をはじめ関係各位の皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し、無事終了することができた。記して感謝する。

調査番号	０４５３		遺跡略号	ＳＧＭ－４	
調査地地積	早良区重留１丁目５００－１		分布地図番号	重留　８４	
開発面積	464.36㎡	調査対象面積	269㎡	調査面積	241㎡
調査期間	2004年（平成16年）10月４日～11月12日				

3．調査地点の立地と環境　(Fig.1・2)

重留村下遺跡群は福岡市の西部に広がる早良平野の南東部、油山北西の山裾に位置する。遺跡の西側は金屑川で画され、東西350m、南北700mの範囲に広がる。

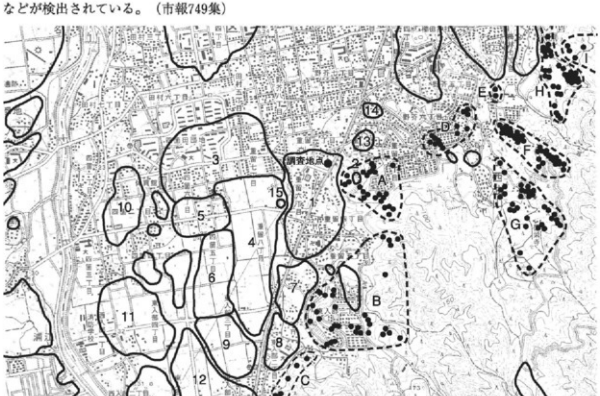
遺跡東側の丘陵部には重留古墳群や九州須恵器編年Ⅱ期の窯である重留古窯跡があり、箱式石棺墓も存在していた。油山北西の山裾には重留古墳群のほか、山崎古墳群、三郎丸古墳群、荒平古墳群といった古墳時代後期の群集墳が存在する。重留古墳群はA～G群の7群があり、A群1基、B群7基、C群3基、D群4基、E群5基、F群4基、G群4基の計28基からなる。このうちA－1号墳とC－1号墳・2号墳、D－1号墳は開発にともない発掘調査がおこなわれ、現存しない。また、G－4号墳も現存していない。

金屑川を隔てた南西側には重留遺跡群や岩本遺跡群、東入部遺跡群が連なり、その北東部には早良平野最南端の前方後円墳である拝塚古墳（重留古墳群H群）がある。重留遺跡群の北には縄文時代後期の室見川流域の拠点集落である四箇遺跡群が存在する。

今回の調査区は重留村下遺跡群の北部にあたり、標高は28mで北西に向かって緩やかに下っている。これまで周辺では南側隣接地で2ヶ所の調査がおこなわれている。

1次調査地点は4次調査地点の南西50mに位置する。市道四箇新村線建設にともない約1,100㎡が調査され、弥生時代中期の土坑、溝、古墳時代後期の竪穴住居9軒、古代、中世の土坑などが調査され、縄文時代後期の鐘崎式土器も出土した。（市報510集）

2次調査地点は1次調査地点と4次調査地点の間に位置しており、店舗への進入路の切り下げにともない約200㎡が調査された。弥生時代の土坑1基、古墳時代後期の竪穴住居7軒以上、中世の土坑などが検出されている。（市報749集）



1：重留村下遺跡群　2：重留古窯跡　3：四箇遺跡群　4：重留遺跡群　5：四箇宮遺跡群　6：四箇船石遺跡群　7：熊本遺跡群
8：ヒワタシ遺跡群　9：岩本遺跡群　10：四箇大町遺跡群　11：清水遺跡群　12：東入部遺跡群　13：浦田要塚遺跡　14：岩隈要塚遺跡
15：拝塚古墳
A：重留古墳群　B：三郎丸古墳群　C：荒平古墳群　D：山崎古墳群　E：影塚古墳群　F：藤ヶ滝古墳群　G：西油山古墳群
H：駄ヶ原古墳群　I：大谷古墳群

Fig.1　重留村下遺跡群と調査地点の位置(1/25,000)

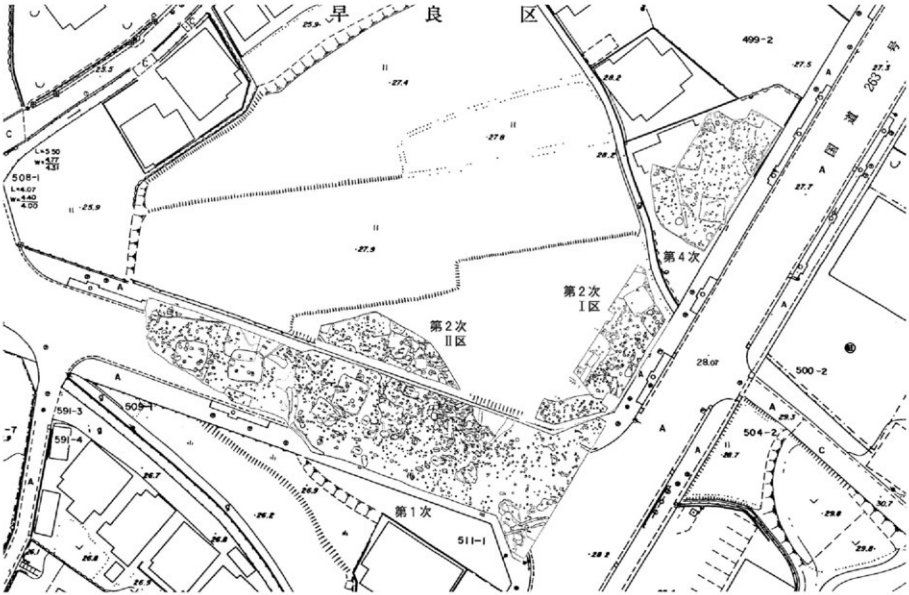


Fig. 2　調査区位置図(1/600)

Ⅱ　調　査　の　記　録

1．調査の経過と概要　(Fig.3、Ph.1～4)

調査は建物範囲269㎡を対象とした。排土置き場の確保のため南北2分割で調査をおこなうこととし、2004（平成16）年10月4日、まず南側から着手した。現地表面から60～80cmほど下げると黄白色粘土もしくは茶褐色混砂土になり、暗茶褐色土を覆土とする遺構が検出できた。竪穴住居、ピットとも浅いものが多く、かなりの削平を受けているものと考えられる。水はけが悪く、降雨により幾度か水没したため、作業の進行が遅れた。10月22日に南側の全景写真を撮影し、10月27日までに実測や遺物の取り上げを済ませ、南側の調査を終了した。10月27日より、排土の反転をし、10月28日より北側の調査を開始した。後半は天候に恵まれ、11月10日に全景写真を撮影、11月12日に埋め戻しをおこない、現地での全調査を終了した。

検出した遺構は竪穴住居4軒、溝2条、土坑8基、ピット多数である。遺物は古墳時代の須恵器・土師器を中心に、中世の土師器や瓦器、白磁、縄文時代の石器が少量出土している。

Ph.1　南側調査区全景（北から）

Ph.2　南側調査区全景（南から）

Ph.3　北側調査区全景（北から）

Ph.4　北側調査区全景（南から）

Fig. 3　遺構分布図(1/100)

2．発見された遺構と遺物

（1） 竪穴住居

ＳＣ０６ （Fig.4～6、Ph.5～7）

調査区南側で発見された一辺3.9mの正方形の竪穴住居である。残存壁高は10cm。主柱穴は４ヶ所で、間隔は芯々で1.6～1.7m、柱穴は径40～50cm、深さは30～55cmである。竈は北側の壁中央に作りつけられている。壁際を少し掘りくぼめて構築している。平面では袖を確認できなかったので断ち割って形状を復元した。５層下面が床面である。壁際には高坏が倒立して出土しており、支脚として使用されていた可能性がある。左袖から土器が出土している。

Fig.6に出土遺物を示す。**１・２**は須恵器の坏である。どちらも底部にヘラ記号がある。**１**は南壁際より出土した。口径10.7cm、受部径12.8cm、器高3.4～3.9cm。口縁は内傾し、立ち上がりはそれほど長くない。色調は灰色～灰白色で、胎土に１mm程度の砂粒を含む。**２**は北壁際の竈の右側から出土した。口径10.7cm、受部径12.8cm、器高4.0cm。口縁は内傾し、立ち上がりはそれほど長くない。灰色～灰褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。**３**は竈内から出土した土師器の高坏。口径13.6cm、脚部径10.2cm、

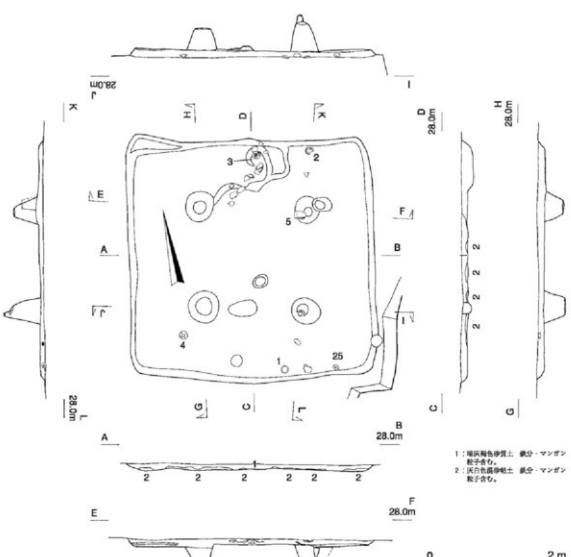


Fig.4　ＳＣ０６実測図(1/60)

Ph.5　ＳＣ０６（南から）

器高8.5㎝。赤橙色を呈する。**4**は南西柱穴脇で出土した土師器高坏の坏部。口径12.7㎝、残存高3.6㎝。色調は赤橙色。**5**は北東柱穴上部より出土した土師器の小型甕。口径16.7㎝、残存高16.0㎝。体部はまっすぐ立ち上がり、口縁を外反させる。内面調整はヘラ削り、外面は縦方向のハケ調整。淡橙色を呈し、胎土に径２～３㎜の砂粒を多く含む。後述する**25**の凹石が南壁際で出土している。

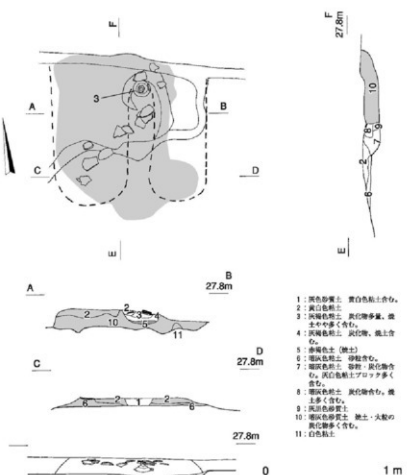


Fig.5　ＳＣ０６竈実測図（1/30）

Ph. 6　ＳＣ０６遺物出土状況（東から）

Ph. 7　ＳＣ０６竈遺物出土状況（南から）

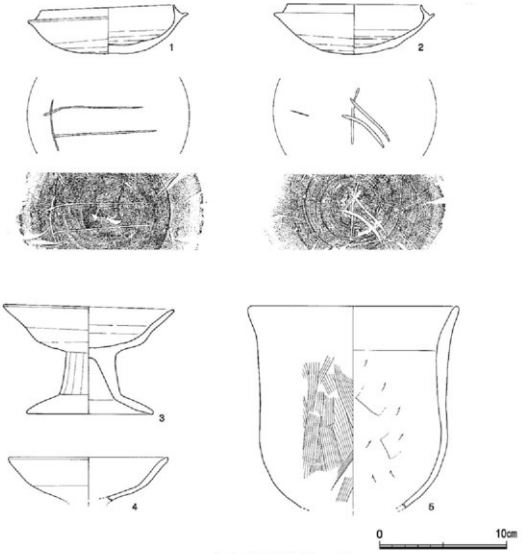


Fig. 6　ＳＣ０６出土遺物実測図（１/３）

ＳＣ０７　(Fig.7～9、Ph.8)

調査区中央西壁際で検出した方形竪穴住居である。南北は4.0m、東西は3.3m分確認し、さらに西側調査区外にのびる。残存壁高は5～10cm。床面にいくつかピットがあるが、いずれも浅く、主柱穴は確認できなかった。北側壁中央と考えられる場所に竈がある。残りが悪く形状を確認することができなかった。壁際を少し掘りくぼめ、壁を少し削り、煙道に接続していたと考えられる。

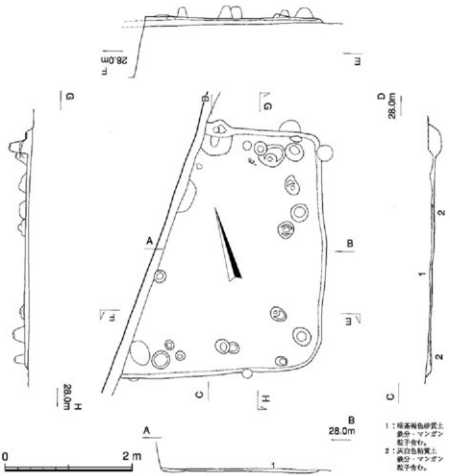
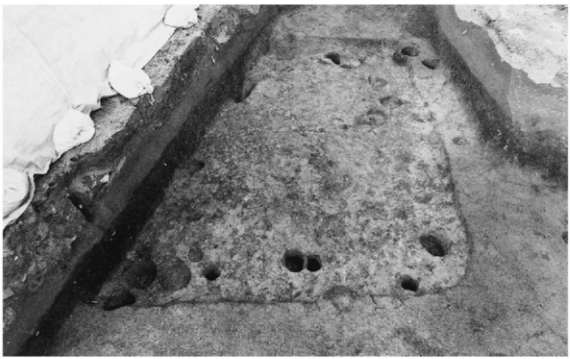


Fig.7　ＳＣ０７実測図(1/60)



Ph.8　ＳＣ０７(南から)

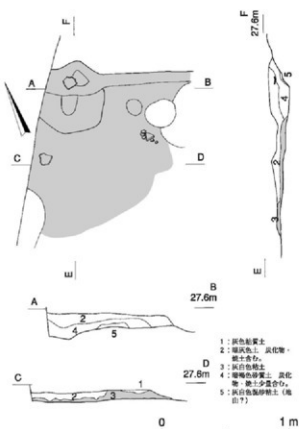


Fig.8　ＳＣ０７竈実測図（1/30）

Fig.9　ＳＣ０７出土遺物実測図（1/3）

Fig.9に出土遺物を示す。**6**は須恵器の坏である。口縁は内傾し、口唇部で直立する。暗灰色を呈する。径１㎜程度の砂粒を含む。

ＳＣ０８（Fig.10～12、Ph.９～14）

調査区北側に位置する方形竪穴住居である。南北4.2m、東西4.0m、残存壁高０～20㎝。南壁と東壁のプランが確認しづらく、かなり検出面を下げてようやく確認した。しかし北東部はＳＣ０９との切り合いもあり、確認が難しく床面まで下がってしまった。竈の残存から、ＳＣ０９より新しいことが確認できた。ＳＫ１２に切られる。主柱穴は４ヶ所で、北東の柱穴がやや内に寄っている。柱の間隔は芯々で1.7～2.0m、柱穴は径30～40㎝、深さ40～50㎝である。竈は北側の壁中央に構築されている。竈の奥壁は住居壁より外に出ており、竈の構築材も住居壁より外に広がっていた。右袖は補強として礫が据えられている。住居北西部に遺物が集中していた。また、中央やや東に平坦面をもつ大きな礫があり、台石かと思われる。

Fig.12に出土遺物を示す。**7**～**9**は須恵器の坏蓋である。いずれも天井部にヘラ記号がある。**7**は口径12.1㎝、器高はやや高めで、4.7㎝。口縁部が折れ曲がり垂直に立ち、端部はやや外反する。天井部３分の２ヘラ削りを施す。灰色～淡褐色を呈し、焼成は良くない。径５㎜の大粒の砂粒を含む。**8**は北西主柱穴脇から出土した。口径13.4㎝、器高4.2㎝。口縁部が折れ曲がり、垂直気味に立つ。色調は灰白色で、径１㎜以下の砂粒を含む。表面は摩耗しており、ヘラ記号も確認しづらい。**9**は口径11.6㎝、器高3.7㎝。天井部から口縁端部まで丸みをもって終わる。灰色～灰黒色を呈し、胎土は精良。**10**は須恵器の坏身。**7**と重なって出土した。口径10.2㎝、受部径12.1㎝、器高3.4㎝。底部は平坦で、口縁部は内傾し、立ち上がりは長くない。端部内面ににぶい稜がある。灰色を呈し、外面に自然釉がかかる。内面は丁寧なつくりだが、外面は底部のヘラ切りは未調整で、砂粒が付着している。**11**･**12**は須恵器の甕の口縁部。**11**は口唇部を内外とも張り出させ、断面Ｔ字状にする。口唇下には凸帯と２本の沈線を巡らせ、その下に連続斜線文を施し、ふたたび沈線を巡らす。**12**は口縁端部を外側に肥厚させ、沈線を入れ、その下に２本の沈線を巡らせ、その上から斜め方向の連続刺突を施す。**13**は土師器の坏。口径12.1㎝、器高4.7㎝。赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。**14**は長胴の土師器甕。口径17.8㎝、胴部最大径23.4㎝、残存高32.1㎝。調整は口縁部横ナデ、外面縦方向のハケ、内面ヘラ削り。**15**は平底の土師器甕の底部。竈の左脇に据えられていた。胴部傾16.4㎝、残存高24.3㎝。厚いつくりで重量がある。外面は荒れて調整不明。内面は粗いヘラ削り。強く削っており、凹凸が激しい。

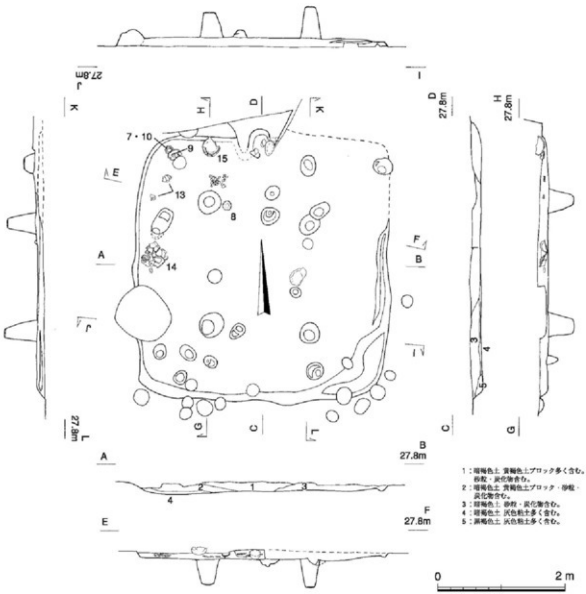
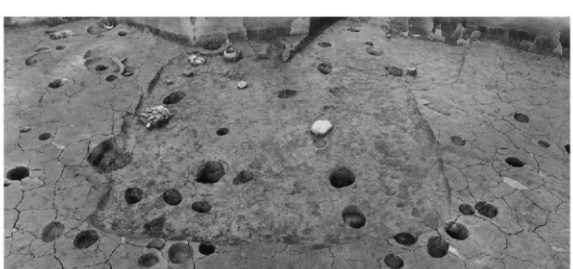


Fig.10　ＳＣ０８実測図（１/60）



Ph.９　ＳＣ０８（南から）

Ph.10　ＳＣ０８遺物出土状況（西から）

Ph.11　ＳＣ０８遺物出土状況（南東から）

Ph.12　ＳＣ０８遺物出土状況（南から）

Ph.13　ＳＣ０８遺物出土状況（南西から）

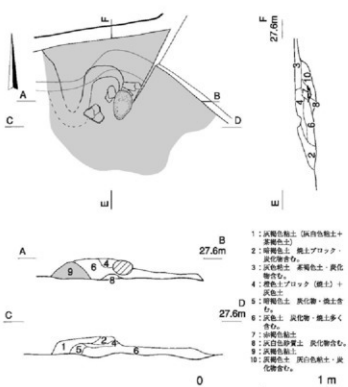


Fig.11　ＳＣ０８竈実測図（１/30）

Ph.14　ＳＣ０８竈（南から）

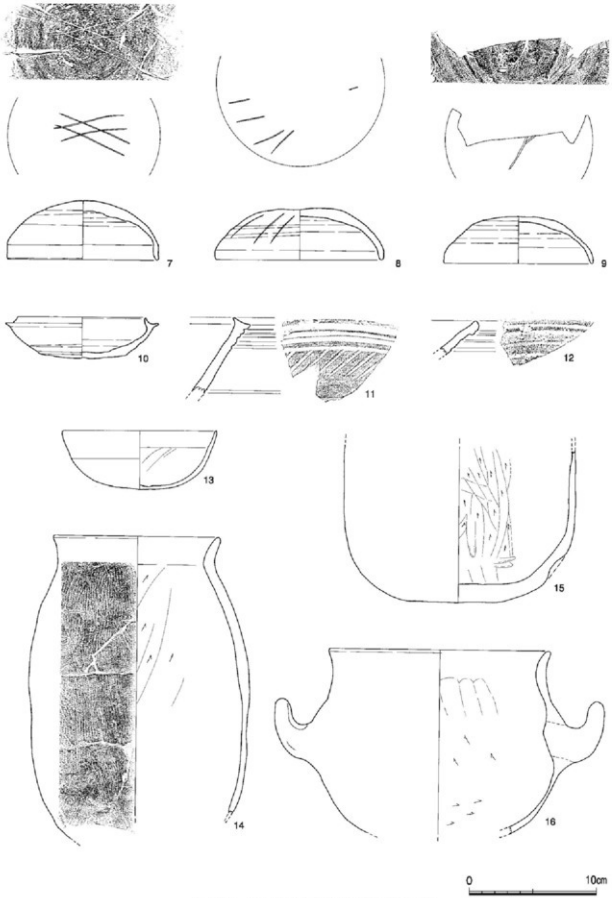


Fig.12　ＳＣ０８出土遺物実測図（１/３）

胎土に砂粒を多く含む。16は土師器の甑。口径23.4cm、残存高19.4cm。横幅がある。口縁部は外反する。径1～2㎜の砂粒を含む。外面は荒れて調整不明。内面は下部ヘラ削り、上部ナデ調整。

ＳＣ０９（Fig.13・14、Ph.15）

調査区北側で検出した方形竪穴住居。南側コーナー部を検出したが、ほとんどが調査区の外にのびている。南西壁3.4m、北東壁1.8m分確認した。残存壁高10～15cm。ＳＣ０８に切られる。他の３軒の住居は軸がほぼ同じで北向きであるのに対し、軸が東に振れている。位置的に主柱穴と思われる柱穴は深さが15cmほどしかなく、全体を掘らなければ主柱穴と断定できない。竈は調査区内では確認していない。

出土遺物をFig.14に示す。17は須恵器の横瓶か。灰色～暗灰色を呈し、胎土に１～２㎜の砂粒を含む。18は土師器の直口坩。口径12.0cm、残存高7.5cm。器面が荒れており調整不明。

（２）　溝

ＳＤ０３　（Fig.15・16）

調査区南西で検出した東西方向の溝。９m分を確認し、北側は調査区外にのびる。南側は深さを減じて消滅するので、削平を受けていると思われる。幅50～70cm、深さ10cm。

出土遺物をFig.16に示す。19は瓦器皿。口径10.7cm、器高1.2cm。黒色～灰色を呈し、胎土に径１～２㎜の砂粒を含む。焼成は不良。そのほか鉄滓が少量出土している。

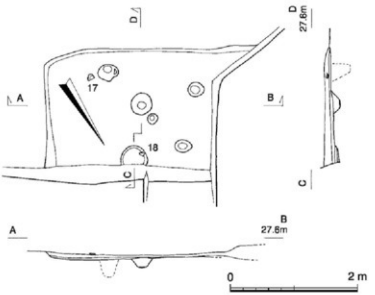
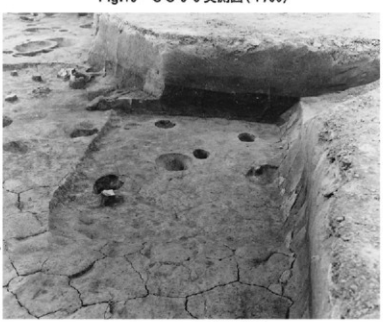


Fig.13　ＳＣ０９実測図（１/60）



Ph.15　ＳＣ０９（東から）

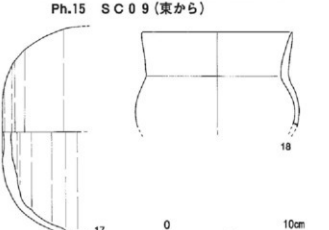


Fig.14　ＳＣ０９出土遺物実測図（１/３）

（3） 土坑

ＳＫ１０ (Fig.17・18、Ph.16)

調査区北側で検出した楕円形の土坑。長軸0.8m、短軸0.5m、深さ10cm。

出土遺物をFig.18に示す。**20・21**は土師器の椀。体部はやや内湾するが、直線的に立ち上がる。**20**は口径16.7cm、高台径6.6cm、器高5.6cm。暗褐色を呈し、径１～２㎜の砂粒を含む。**21**は口径16.7cm、高台径7.1cm、器高5.1～5.5cm。灰褐色～淡茶褐色を呈し、径１～２㎜の砂粒を含む。**22**は土師器の坏。残存高2.0cm、底径9.0cm。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。淡橙白色を呈し、径１㎜程度の砂粒を少量含む。そのほか鉄滓が出土している。

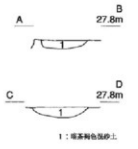


Fig.15 ＳＤ０３
断面実測図（１/40）

（4） その他の遺物 (Fig.19)

23は須恵器の椀。口径9.6cm、高台径6.0cm、器高5.8cm。色調は灰白色で胎土に径１㎜の砂粒を含む。８世紀初頭前後の遺物。ＳＫ１４出土。**24**は土師器の壺。重機にて掘削中に出土した。口径18.2cm、胴径33.6cm、残存高17.8cm。器壁は厚い。調整は口縁部横ナデ、胴部は内面ヘラ削り、外面タタキの後、ナデ。淡橙白色を呈し、胎土は径１～２㎜の砂粒を含む。**25～27**は縄文時代の石器である。今回の調査では縄文土器は出土していないが、１次調査で縄文時代後期の鐘崎式土器が出土している。**25**は凹石。玄武岩製。長さ10.9cm、幅8.9cm、厚さ5.2cm。両面とも使用している。ＳＣ０６出土。**26**は黒曜石製の石鏃。先端部を欠損する。残存長1.8cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm。ＳＣ０８出土。**27**は古銅輝石安山岩製の石鏃。風化が激しい。先端部と片脚を欠く。残存長2.4cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm。ＳＫ１０出土。**28**は土製の玉。径1.2～1.4cm。黒褐色を呈し、径１㎜以下の石英・長石を含む。ＳＣ０７出土。

Fig.16 ＳＤ０３
出土遺物実測図（１/３）

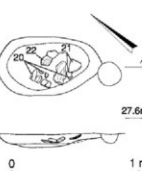


Fig.17 ＳＫ１０実測図（１/30）

Ph.16 ＳＫ１０（南西から）

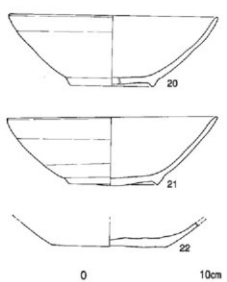


Fig.18 ＳＫ１０出土遺物実測図（１/３）

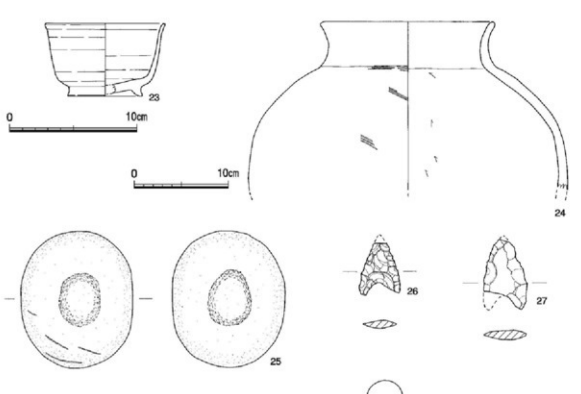


Fig.19　その他の出土遺物実測図（1/1・1/3・1/4）

Ⅲ　ま と め

今回の調査では、古墳時代後期の竪穴住居を中心に、古代・中世の遺構を検出した。個別に説明しなかった遺構ではＳＫ０５・１１で中世、ＳＫ１４で古代の遺物が出土している。ＳＤ０２・ＳＫ０１・０４・１２・１３は出土遺物が少なく時期が確定できなかったが、中世に属するものが多いと思われる。ピットは古墳時代の遺物が出土するものが多かったが、古代の須恵器や中世の白磁や土師器小皿も出土している。建物としてまとめることはできなかったが、古墳時代後期から中世にかけて集落域であったと考えられる。

１・２次調査をあわせて約1,500㎡の調査で古墳時代後期の竪穴住居は20軒以上となった。重留村下遺跡の北部ではこの時代の集落がさらに広がるのであろう。出土した須恵器の多くは九州編年のⅣＡ期であり、ＳＣ０９がやや古くⅢ期と考えられる。東の丘陵部にある重留古墳群は調査された古墳も少なく、また、出土遺物も少ないが、ほぼ同時期と思われ、この集団が古墳群を造営したと考えられる。重留古窯跡と集落は若干の時期差があるが、もう少し周辺の調査がおこなわれれば、須恵器生産をおこなった時期の集落が明らかになるかもしれない。

弥生時代の遺構はなく、弥生土器の小片が僅かに出土したのみで、２次調査が弥生時代集落の北限であろう。古代の遺構は非常に散漫で、１・２次調査と同様である。中世の遺構は12～13世紀と考えられるが、１次調査より、遺構密度、遺物量は少なく、集落の中心からはずれていくようである。

報告書抄録

ふりがな	しげとめむらしたいせき　さん
書　名	重留村下遺跡　3
副書名	重留村下遺跡群第4次調査の報告
巻　次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	880
編著者名	田上勇一郎
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神1丁目8-1　TEL　092-711-4667
発行年月日	西暦2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しげとめむらした いせきぐん 重留村下遺跡群	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 さわらしげどめ1ちょうめ 早良区重留1丁目 500-1 500-1	40130	0324	33° 31′ 58″	130° 20′ 28″	20041004 ～ 20041112	241	店舗付共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
重留村下遺跡群	散布地	縄文		石鏃 凹石	
	集落	古墳	竪穴住居　4 ピット　多数	土師器 須恵器	
	集落	古代	土坑　1 ピット　多数	須恵器	
	集落	中世	溝　1 土坑　3 ピット　多数	土師器 瓦器 白磁	
		不明	溝　1 土坑　4 ピット　多数		

重留村下遺跡　3

－重留村下遺跡群第4次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第880集

2006年3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印　刷　松影堂印刷株式会社
福岡市博多区吉塚5-13-40

SHIGETOME MURASHITA SITE 3

－ Results of the 4th excavation of Shigetome Murashita sites －

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.880

重留村下遺跡3

福岡市埋蔵文化財調査報告書第八八〇集

二〇〇六

福岡市教育委員会

2006

THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY